土曜 ライフ・楽しむ

3世代の創作 ルーツの地・福井へ

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」編集長・真鍋康利さん

羊蹄山（通称・蝦夷富士）は、どこから眺めても美しい山です。

そのふもと、倶知安町の小川原脩記念美術館で毎年、「麓彩会展」が開かれます。1958年、小川原を慕う当時の若手画家たちが、地方から文化の種をまこうと始めた展覧会で、この冬の開催で62回目となりました。

その倶知安町にギャラリー併設のアトリエをかまえる徳丸滋さんは、古くから麓彩会展の中心メンバーとして活躍、写真家の長男徳丸晋さんも近年仲間入りしました。目前に羊蹄山、窓から手の届くところにヤマガラが飛来するなど素晴らしいところです。

○　○　○

徳丸家は110年ほど前に北海道に移住してきたそうですが、詳しい来歴は明確ではありませんでした。そこで晋さんが調べようと思い立ち、まず祖父の古いアルバムを手掛かりに、明治の終わりごろ北前船で移住してきたらしいこと、岩見沢で薬屋を営んでいたこと、帯広に転居したことなどが集合写真などで少しずつ分かってきました。

戸籍を取り寄せ家系図を埋める作業の中、祖父の出身地はどんな所か、なぜ北海道に渡ってきたのかに興味が湧き、生まれ故郷の福井県あわら市を訪ねました。同姓の方たちの協力を得て、様々な土地を巡り、長老の方に会い多くの発見があったそうです。

その貴重な体験を経て、思いがけないことが起こりました。3世代の創作の足跡をたどる展示会「北海道に渡った徳丸三世代展」が、あわら市の「金津創作の森美術館アートコアギャラリー」で4月3～11日に開催されることになったのです。

臼田亜浪の俳句結社「石楠」で俳句を学び、句集「葦垣」「楓嵐」を出版した祖父兼吉さんは俳人（俳号・沓坡）でした。帯広生まれの滋さんは、銀行に勤めた後に絵画を生業とすることにし倶知安に居を定め、自然と対話しながら絵を描き続けています。また倶知安にある半月湖で撮り続ける四季折々の美しい「水面」が話題の写真家晋さん。3代にわたり脈々と受け継がれた創作への思いが一堂に集まるのは見ものです。

残念ながら当方に、現地を訪れることはかないません。その様子は展示会後に聞かせていただこうと思います。

○　○　○

1977年に米国の作家アレックス・ヘイリーが先祖を訪ねるドラマ「ルーツ」が人気を得ました。西アフリカから米国へ奴隷として連れてこられたクンタ・キンテの話、覚えていますか。ルーツという言葉は以来日本でも、先祖の意味で使われるようになったように思います。巣ごもりのお供に、皆さんもルーツを探してはいかがですか。